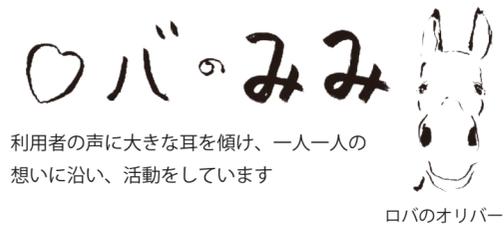


でこぼこおむすび みんなの茅の家

富士山を眺める地から、先人の智慧を生かした未来の福祉のあり方の提案

事業面と建築、ランドスケープの設計コンセプト

茅葺きの結の精神のように、利用者、運営者、地域、あらゆる生きとし生けるものたちなど、1つ1つの異なる存在、個性を結び、人、地域、自然、みんなにとって健康的であたたかい居場所になるように



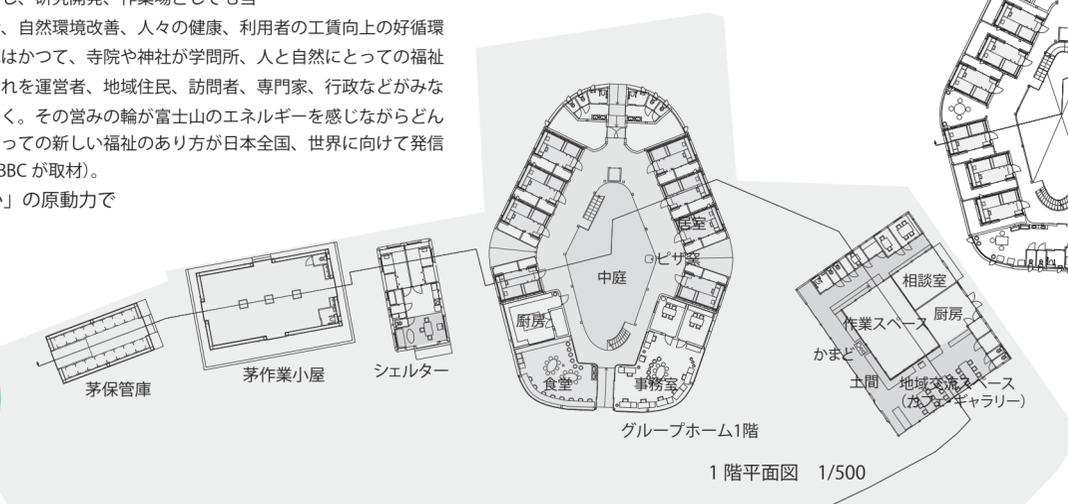
茅葺きは森づくりから茅刈り、葉むしり、茅束づくり、葺く、屋根から降ろして田畑の肥料にするなど、様々な仕事があり、誰でも何かしらできるため、福祉との相性がいい
わたしたちの健康と仕事につながり、自然や人に役に立てる茅の家に住みたい (利用者)



設計⑤ 地域の生きた営みとそれによる自律的で持続的な新たな地域文化環境をつくる建築

昔は毎日の営みによって建築や集落はつくり維持されてきた。ここでは、利用者が受け身ではなく、自らが社会、自然の一員としてつながり、建築を生かして仕事を行い、生活をする営みを続けることで、新たな地域の環境をつくっていく。富士山麓での茅刈り、大屋根でのカリヤス刈り、茅を使った建築材・製品づくり、茅葺職人の補助作業、富士山の湧水でのワサビづくり、ピオトープの維持、周辺農地での野菜育て、地域交流スペースで出すご飯づくり。寝泊まりできる近隣の古民家を拠点に、建築の内装材、土間、土中環境改善、ピオトープ、かまど、ピザ窯づくり、維持などに多くの人に参加してもらい、生きた学びがあり、愛着のあるみんなにとっての居場所となり、茅の良さやこれからの福祉について語り合う場、地域の伝統行事や生活の技を学び、伝える場にもなる。茅葺きの専門家が茅、土、木などの地域資源と伝統の智慧を生かした現代社会で使える製品づくりをサポートし、研究開発、作業場としても当施設を機能させ、地産地消、資源循環、自然環境改善、人々の健康、利用者の工賃向上の好循環をつくり出す原動力を内包する。それはかつて、寺院や神社が学問所、人と自然にとっての福祉施設であったことの現代版である。それを運営者、地域住民、訪問者、専門家、行政などがみなで分かち合い、補い合って、支えていく。その営みの輪が富士山のエネルギーを感じながらどんどん大きくなり、人と地域、自然にとっての新しい福祉のあり方が日本全国、世界に向けて発信されていく (2022年9月、イギリスBBCが取材)。

「分かち合い、支え合い、補い合い」の原動力でこれからの福祉をつくる

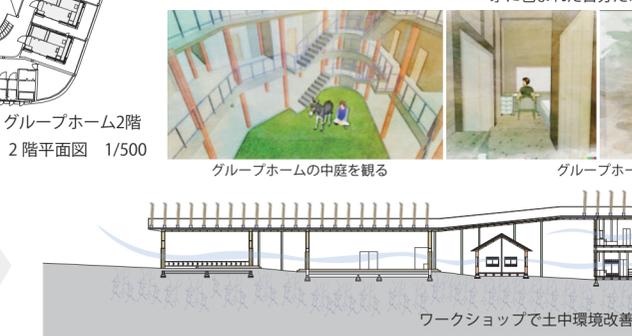
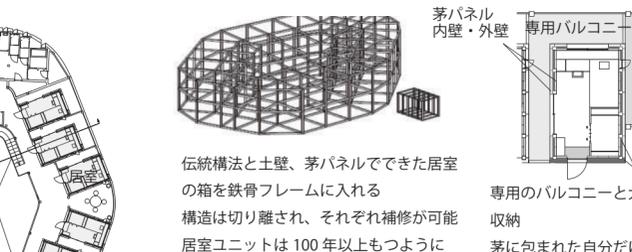


設計① 地域の風景の一部になるように

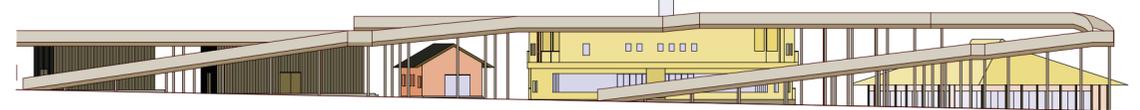
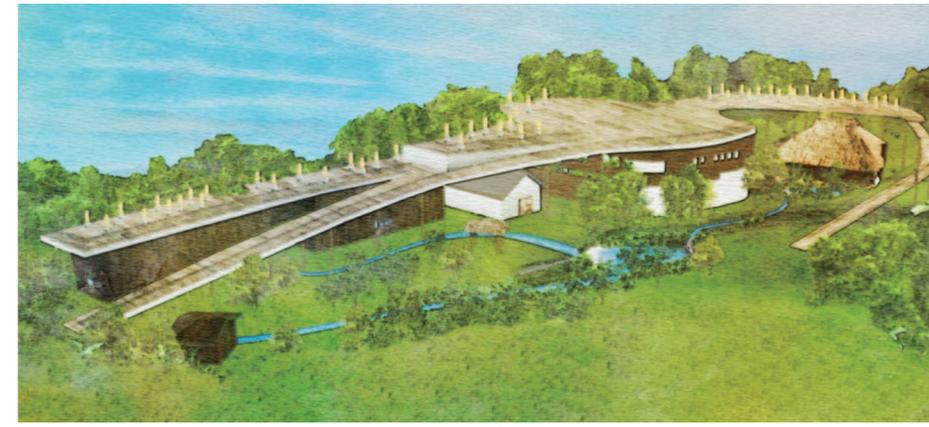
計画地は静岡県御殿場市上小林地区。富士山を眺め、なだらかな傾斜が続く富士山の一部である。敷地から1km内には新東名高速道路新御殿場ICがあり、数年後に東京方面まで開通する。周辺には地域の森、小学校、保育園、民家、田畑などがあるが、近年、圃場整備や開発で地域の風景は大きく変わろうとしている。本事業では設計者が運営者の一員として、実際に計画地に住み、この地の歴史文化、自然環境などを徹底的に調査し、地域の人々のつながりをつくり、地形を生かし、風景に溶け込み、新たな地域の風景を生み出すようにデザイン。地域に開く部分(就労継続支援施設=作業棟、茅作業小屋、茅保管庫、シェルター、庭など)と閉じる部分(グループホーム)を敷地全体や富士山を望む周辺環境と調和するように大屋根で結んだ。それは異なる個性を包み込み、結ぶという本事業の理念をカタチにしたものである。大屋根は庭と一体となり、利用者やここを訪れる大人や子どもはぐるぐると日々新たな発見があるいろんな景色や生きもの(ロバ、ミニチュアホース、ヤギ、小鳥、虫、魚、カエル...)、人の活動を眺めて楽しみながら敷地全体をまわりながら、休んだり、癒されたり、語らったり、ご飯を食べたり、富士山を眺めたりできる。ここは、現在の当法人の施設がそうであるように、誰もが気軽に来れる地域の公園のような憩いの場になる。



- 既存の環境中の高周波
- ①ブルーベリー畑のチップを踏み音：4万～18万Hz
 - ②用水路・・・4万～14万Hz
- 計画している環境中の高周波
- ①水車・・・4万～10万Hz
 - ②水路・・・4万～14万Hz
 - ③水琴窟・・・4万～14万Hz
 - ④大屋根のカリヤスが揺れる音・・・4万～18万Hz
 - ⑤カリヤスを刈る音・・・4万～18万Hz
- *値は設計者の測定による



建築概要
敷地面積：4444㎡
延床面積：1202.1㎡
・就労継続支援B型施設(作業棟、シェルター、茅作業小屋、茅保管庫)
・グループホーム
・付属施設として水車、東屋(ワークショップ形式で建築)



立面図 1/500

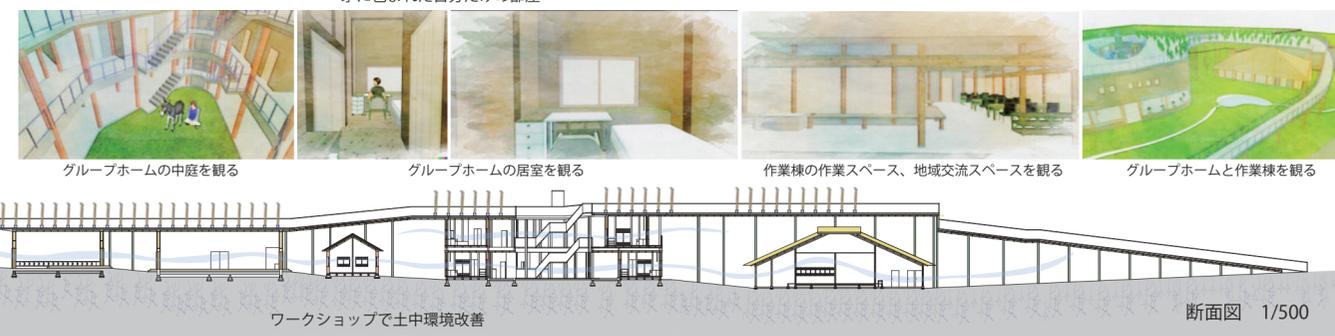
設計③ 最先端研究を生かし、人の心身の健康をつくる建築、ランドスケープデザインの世界初の試み

御殿場は茅の生産量日本一であり、世界遺産白川郷にも使われ、茅刈り、茅葺き技術はユネスコの無形文化遺産にも登録されている。茅、木、土などで構成されている茅葺屋根に住んでいる人は高齢でも健康な人が多く、アトピーやアレルギーになる人も少ない。研究を進めると、茅が風で揺れる音、茅刈りや茅葺屋根の葺き替え、茅を扱う作業からは高周波という精神疾患にも効果があり、人の免疫を上げ、ストレスを低減し、人間本来の感性を高める作用があること、茅葺屋根には免疫力を上げる菌が多く存在し、病原性の菌が繁殖せず、家の内側でも自然環境と同じような微生物環境であり、健康的な住まいだということが明らかになった。また、茅は高い断熱性能ももち、空気清浄効果もあり、天井、壁、床に用いることもできる。加工も容易で、本整備のために考案した内壁・外壁材の茅パネルも利用者自らつくることができた。こうした研究の知見を生かした建築、ランドスケープをデザインした。



設計④ つくることで自然の循環をつくり出す建築

建築資材には、地域資源を多用する。当施設の大屋根で育てるカリヤスをはじめ、富士山麓のスキ、間伐材、土、周辺の古民家から出た古材を使う。なるべく自分たちで建築資材を調達し、コストを抑えながらも、針葉樹・広葉樹がバランスよく成長し、微生物など目には観えないものも含めて、多様性のある豊かな資源やいのちを循環させ、それによる防災にもつながる豊かな川、海もつくる。それが③の高周波、微生物をはじめ、人の心身の健康にも還ってくる。茅場は水源涵養、土壌浄化、保水力の向上、森林よりも高い二酸化炭素吸収や炭素固定、多様ないのちの育成なども促進する。耐久性がスキの3倍程度ある茅の一種であるカリヤスは標高が高い地域に生え(計画地は海拔約550m)、かつては様々な地域に生えていたが、近年はスキに浸食され現在とても貴重なものになってしまった。大屋根にプランターを配置し、安全にカリヤスを育て、地域の新たな風景もつくり、利用者が毎年収穫し、当施設の維持、仕事の材料、日本各地への移植を行い、環境面、健康面、仕事面などにつなげる。通気性や調湿性があり、人の心身の健康、あたたかみのある空間をつくることができ、高寿命、将来的な移築・改築・再利用などでもできるなどの伝統構法の智慧や技の本質を生かし、茅、木、土などの身の回りの資源を使い、冬寒いなど古民家の課題を解決しながら快適で、施設に必要な要件や法規を満たしながら伝統を現代にアップデートしたデザインを行った。



断面図 1/500